

# 白選五十一首



岩田 正

日本人われをさげすみ浮浪児は物をねだると米兵に寄る

雨に濡れ身をふるはする野良犬はみみずの這ふを嗅ぎるたりけり

駅出でて五分川辺に沿ひ五分坂は三分のぼればわが家

イヴ・モンタンの枯葉愛して三十年妻を愛して三十五年

コロッケを揚ぐる肉屋の香が流れ小学校の帰路ぞかなしき

寒いから鴨は孤独の羽をもつその羽に首埋めて安らふ

孤りなる想ひに桜見上ぐれば枝さし交し花は歌へり

をみなごに花びら流れとうたはれしあはれ達治のをみなごぞ君

千六本うまくきざみぬトントンとこんなよき朝われにあつたか

高跳びの反り弓の反りなべて反るもの美し女体も反ることはある

一千万の少女が朝あさ髪洗ふ泡立つ水の行方をおもふ

〔靴音〕

〔郷心譜〕

第一歌集『靴音』の頃は、人間ってそんなに真面目に、ひたすらに生きられるか、というほどの気持で毎日を生き、そして歌った。だから歌も、極めてはつきり素朴で、正直で、いわば一本調子なのである。

当時（昭和三十年代）、前衛なんか出ているし、みんな技法を凝らして歌っている。私は戦後民主主義の中でふかく呼吸し、いかな美的な芸術的な歌でも、基本においてこの良心的な傾向に背をむけたり、傍観的なものは駄目だと思っていた。まこと、たいへんな直情型で、単純明快なうた作りであった。その時は、それでいいとした。

そのうちに、この程度の詠法では、とてもそれ以上の作品が作れないのに気づいた。歌うより、自分の思想なり、考えなりを早

ときにわれら声をかけあふどちらかがどちらかを思ひ出だしたるとき

「レクエルド」

ラッシュ時の電車にのれば日本人間一杯とわれをはじけり  
いにしへも火と言ひいまも灯と言へり光度は変れ心ともせり

テレビの上時計とこけし共存す時計はせかしこけし回顧す

シクラメン彩見てあれば隣り家の少女のあぐるこゑは合ひたり

シクラメン隣室に置きものを書くすこし寂しく花を思ひて

魔されし理由はとめ救はむとして斬られしと妻には言へず

愛のこと酔ひて囁く若きこゑカウンターの背にくらく響けり

餃子食べし美人と前後し店を出るきみもニンニクわれもんにく

死はつねに見おろされを見おろすはからくも生の威儀保つため

世の悪意・善意見てきしまなこ美し永久に閉されしまなぶたのうち

「いつも坂」

駅の椅子に惚け寝る男人生がああああ垂れる駄目だ終りだ

あんたさ、どこさと道に遊ぶ子ら幼き日より出自問はるる

まぼろしのどんだん橋はないと言ふなくとも渡ろ思ひ出にある

友待つと思ひてくだり妻待つと思ひてのぼるわが柿生坂

自然との交歓は犬にまさるなし雨のあしたの土の香を嗅ぐ

ああ秋だしみじみとしてまさぐれば岡井にある髭われにあらざり

歌壇名簿にわが名洩れしは鬼籍にも入れられしかと某女さわげり

英さんが翁の面うつ氣迫こめとうとうたたりとうたたり、やあ!!

亭亭と立つ樹にすがりまぐはへるひぐらし澄みて空中の恋

く正確にうち出せるのは、現代短歌を論ずることだと思ふようになった。私は歌をやめて、評論オンリーに転じた。『靴音』を出して、数年のちである。

昭和六十年に入ってから、ある晩のこと、テレビでテニスの試合をみた。世界ナンバーワンのレンドルが、苦戦して、しきりにラケットを気にしていた。その時、ふと私にレンドルの気持が伝わった。

というのも、私は中学時代、マラソンをやり、水泳もやり、剣道もやり、大学時代は卓球をやり、高校の教員時代はテニスもやった。素人としては、それぞれ相当やったので、すぐレンドルの心理がわかったのである。

スポーツもやめ、好きな音楽も聴かず、また歌も作らず、ひたすら日本民主化のため、という大義名分で、そういう論や行動を直線的にやるのが、実に人間を貧相にすることに気づいた。

自分にひきつけて、もっと悩まねばいけない。平成に入ってから、矢継ぎ早に四つの歌集を出した。でも私の歌はこれからだ。自己を深めることと、世の政治・風潮の悪しき側面と闘ってゆくこと、この一致に辿り着きたいと思っている。

(いわた・ただし「かりん」)

透明な蟬の脱殻柚子の木にすがれりそつとしておかむ死は

停まるたび不思議と思ふ鈍行の鄙びし駅にはたれかが待つと

雨うれしをみなな的情绪枯れし草しつとりとしてよみがへるらし

通過する鮎を眺めて黙しをりカウンターに熱き茶啜りて孤独

人生は回転寿司のめぐりあひ玉にならんでまた蛸が来る

鬼の身実やさしかなしと言ふなれば妻とふ鬼とわれは棲みきし

チョコレートひと口噛めば恋の味ふた口妻の味とこそ知れ

カミニート、小径と言へり小径のみ辿れりたどり行かむわが生

急ぐ・急ぐ好まぬ理由ススメススメ兵隊ススメと読本ありき

指唇にあててシイーと囁けりかなしきことの多かりし母

「和韻」

わがひと生耳の倦むまで音ききぬ音盤・SP・LP・CD

「や」と弓手控へ「おおつ」と馬手を突く乱打の兆しみする鼓の前

日本の太鼓の醍醐味打ち響む所作・見得・閑寂うたぬことよき

柿生坂くだれば麻生の川流るどこにでもあるあつてよき川

ひたぶるに急ぎ歩むわれ歩のたびに人生こぼしてゆくにやあらむ

世の中はせはしなし見よ交尾していのちのきはにも動かぬいなご

握りこぶしこぶしはきつく握るべし無を握るゆゑかなしみぞ増す

「風月」のむかしの椅子に夢はありいま「ルノアール」に坐して夢枯る

人生のかたはらとほり去ることし雨の茶房の窓過ぎる傘